

昭和二十四年七月二十三日發行
（第三種郵便物認可）
（毎月一回・十五日發行）

（通第一四二号）

慈光

第十三卷 第一号

目次

意訳後世物語聞書……………	花田正夫……………（1）
耳底録……………	
——阿闍世王の入信——……………	柳瀬留治……………（16）
一道会の記……………	榊原徳草……………（19）

意識後世物語聞書

序

花田正夫

親鸞聖人の七百回忌の新春を迎えました。幸に聖人の御導きを蒙る人々は、夫々のいとなみをとおして、いよく聖人を渴仰せられていることでありましょう。私も昨年春頃から、聖人の御晩年に、よく読むようにとねんごろにお勧め下され、そのうえ書写して下さった、唯信鈔、後世物語を、私自身に先ず読ませて頂き、次いで意識させて頂きました。意識唯信鈔はすでに御読みいただきましたので、年頭に、意識後世物語を記載いたします。

本書は聖人八十二歳の建長六年の九月に書写せられた真本が現存してあります。

大意

本書は、読んで字の通り、念仏で後世のたすかるところの物語であり、後世を大切に思う道心の物語であります。幸に人間に生れ、稀に仏法にあい、ことに凡夫往生の大道、浄土念仏の門に導き入れられて、口に念仏申すまでに育てられた者が、なお、定散自力の執心にほだされて、うたがい、おそれ、ためらう者に、それぞれの病根を知りつ

くされて、しかも応病与薬の妙法が説かれてあります。

愚考いたしますのに、法然聖人は、四十三歳の時、善導大師の玄意を「一心専念弥陀名号……順彼仏願故」の一文に得られて「余が如きの下機の行法は、阿弥陀仏、法蔵因位の昔かねて定めおかるをや」と随喜渴仰せられ、

南無阿弥陀仏 往生之業
念仏為本

と、高く掲げて、凡夫直入の白道、浄土の一門を開顕して下さいました。

ところが、一念義の偏向の人達があらわれて、ただ念仏のみではいけない、学問して三心のところをよく知らねば往生はむずかしいと主張し、称名を軽視し、遂に称名を非難するまでになりました。

これに対し法然聖人は「観念をこらして申す念仏でもなく、学問して念のころをさとりて申す念仏でもなく、往生極楽のためには、お慈悲の念仏一つで必ず往生させて下さるぞ。ただし、三心というようなむずかしいことも、自

然にそのうちにこもつていゝ……と説かれて、この邪執を誡めていられます。

即ち「信を裡に含めて、念仏を表に勧め、悪をおさえ給うた」のであります。

すると今度は、念仏を募つて信を軽視する、多念義の偏向の者があらわれ、律法的な自力募りとなる弊害も一方に出来るといふ始末で、聖人も或時

「ツヨク信ズル方ヲ勸レバ邪見ヲ起シ、邪見ヲ起サセジト誘フレバ信心ツヨカラズ成ルガ術ナキ事ニテ侍ル也」と、悲歎して居られます。

後世物語聞書も、この一念義におちるものや、多念義に偏するものを悲しみ、自力作善にかゝすろものを歎かれての過に教えてあります。ここに「罪の深きことは願力で滅し、無上の善根は名号に成就して下されたことであるから、我身のよからんとも、あしからんとも心にかけず、ただひとえに願力の不思議を仰いで念仏申すばかり」と、義なきを義とする、本願自然の信界を教えられることでもあります。

著者

さて著者については、三河の了詳師によれば、隆寛律師の物語を、弟子の静遍僧都が聞き書きせられたと推定してあります。物語が隆寛律師であらうことは、住田智見

師も申していられますが、筆者の静遍僧都には多少の疑問を投げて居られます。このことは後世の学者の決定を待つ他はありません。

但し私といたしましては、了詳師に従いまして、律師と僧都とし、その伝記を略述いたします。

一、隆寛律師の略伝

律師は、栗田の関白五代の後胤、藤原少納言資隆の三男として、久安四年に京都に生れ、壮年に及んで出家し、慈鎮和尚の門に入られ、学徳ならびて拔群の誉高く、和尚からも貴重せられ給うて、叡山の領袖となるべき人とまで讃えられたのであります。この律師、法然聖人の禅室に参じ頻りに出離の要道を尋ねられましたけれども、聖人は始めの程は一向に打ちとけられる風もありませんでした。そののちに法然聖人も隆寛律師の往生の志願の深いことを知られると、非常に驚喜せられて、ねんごろに浄土の法門を授けられました。

建久三年に、叡山の根本中堂での安居の結願の日に、律師を導師に招ずるという議がおこりました。ところが反対の人達は、律師が法然聖人の禅房に出入して念仏するといふので、非難の声も出ましたけれど、何分にも拔群の名誉傍若無人とありますように、律師の学と云い徳と云い、ず

ば抜けておすぐれになつていたので、遂に導師と決定されました。然しその時の法筵に集つた者は皆随喜の涙にくれたと伝えられます。その上、その時の名譽によつて、叡山を上下するに興を許されたのであります。

元久元年三月には、小松殿の御堂で、法然聖人から親しく『選撰集』の附屬をうけられ

「これは月輪殿の仰によりて採ひ進ずるところの選撰集なり。載すところの要文要義は、善導和尚浄土宗をたて給う肝心なり、早々これを書写して披見すべし。若し不審あらば問うべし。源空存生の間は秘して他見に及ぶべからず死後の流行は何事のことかあらん」と仰せられたと伝えられます。

又或時、法然聖人が初めは阿弥陀經の誦誦と念仏をならべていられたのを、後には念仏を一向にせられたと聞かれた、律師はそれまでは毎日阿弥陀經を四十八巻誦誦していたのをさしおかれて念仏ばかりせられたと伝えられます。又律師の常の詞には、善導大師の十八願加減の文の

「若我成仏、十方衆生、称我名号、下至十声、若不生者不取正覚。彼仏今現在世成仏、応知本誓重願不虛、衆生称念、必得往生」

の一節を渴仰せられて、

「衆生称念という、われあにその人にあらざらんや。必

得往生といえり、ひとりなんぞもれん」とて感涙甚だしかりし、と伝えきまします。建暦二年、法然聖人往生せられるや、その六・七日の忌日には聖覚法印が導師をつとめられ、五・七日には隆寛律師が導師となられ、次の銘文を表白せられました。

普く道俗に勸めて、弥陀仏を念せしめ能く念ずれば、皆化仏菩薩を見ん明らかに知りぬ称名は要術なりと。宜なる哉源空、道俗ともに慕い、物を化し給う。信珠、心に在りて、心は迷境を照し疑雲永く晴れて、仏、まどかに頂を光し給う

安貞元年に及び、叡山の定照が「彈選撰」という破文を作り、隆寛に送りしたので、律師は「顯選撰」を著してこれに答へ「汝が僻破のあたらざることたとえば暗天の飛礫の如し」と鋭く論破せられました。定照はいよく憤つて山門にふれ、衆徒の蜂起をすゝめ、隆寛、幸西の流罪、大谷の法然聖人の墳墓を破却して、死骸を鴨河に流すべしと宣言せしめるに及びました。そこで聖人の墳墓を嵯峨に移し、安貞二年正月廿五日に茶毗にふしたのであります

律師の流罪も奥羽に決定し、京都での最後の別時念仏を勤修されて、森の入道西阿に伴われて、嘉祿三年七月に京都を進發せられましたが、西阿のはからいによつて弟子の実成房が身代りとなつて奥州に下り、老年の律師は西阿房の有縁の地相模国飯山に留られたのであります。その途上で相模の四郎は御教化を乞い、一期一会の御縁により、深く仏道に帰依し念仏申しながら、武人としての生涯を目出度く終つたのであります。

律師は、飯山にてほどなく発病せられ遂に十二月十三日に念仏の息絶え終われ、時に行年八十でありました。

最後の病中記に

「我きく、達磨和尚は配所のくさむらに跡をのこし、慈恩大師は穢土の庵に名をとどむ。ひとりとは仏心宗の根源、ひとりとは法相宗の高祖なり。大國なおしがり、いわんや辺州のや。上古またかくの如し、いわんや未代おや。苦海やすからず、浮生夢の如し、ただ聖衆の来迎をのぞむ、更に有為の遷変をいたまず」

と誌され、次の一首を詠じられました。

御名かよう声すむやどにいる月は

雲もかすみもさはこそあらめ

著書には承久三年に、但馬宮の質問にこたえて、浄土要

義三巻。法然聖人滅後、一念多念分別事、自力他力分別事夫々一巻を撰述せられました。後者の二巻は、親鸞聖人が非常に尊ばれ、文意などもお作りになつて、同朋に勧められました。

二、静遍僧都の略伝

静遍僧都は、平清盛の義母、池の禅尼の孫であります。禅尼がかつて、源頼朝が亡き子家盛にあまりにもよく似ているので、清盛に生命乞をしたおかげで、頼朝は伊豆に流罪となつたのであります。そこで平家の滅亡の際に、静遍僧都は特に助けられたのであります。

出家して真言密教を学び、すでに師範となられました。その当時、法然聖人の選撰集が非常な勢で流布しておりましたが、南都の風潮の儘に之を論破しようとして企てられて、選撰集を読まれるに及び、かえつてその真実に触れて念仏の行者となり、法然聖人の廟所に詣でて大懺悔せられ、名も心円房と号して隆寛律師に師仕せられました。

僧都の遺された御自督の詩に

一期所案の極み 永く世の道理を捨つ
唯阿弥陀を称して 語黙常に持念す

世の道理を捨つ、とは、念仏について世間では讃否区々

議論百出でありますが、それを捨てて、唯常に御名を念じ持つている、との述懐であります。

又常には、法照禪師の五会法事讃の

彼の仏の因中弘誓を立つ

名を聞いて我を念せば、総て迎え来らしめん

貧窮とはた富貴とを簡ばず、

下智と高才とを簡ばず、

多聞と淨戒を持てるとを簡ばず、

後世物語聞書

ちかごろ、淨土宗の①明師をたずねて、京都の東山のほとりに居られる禪坊にお参りしてみると、そこには京都一帯の念仏者はもとよりのこと、近くは山城・大和・摂津・河内・和泉の国々や、遠くは、東海道・南海道・西海道・山陽道・北陸道・東山道などの、後世を願う人達が集まられる所である。丁度その日も、十四、五人ばかりの人々が連坐して、打ち見たところ、どの人もくまじめで、外相だけでなく、身も心も後世者にふさわしい様子の人々ばかりであつた。そして

「どうしたならば、今度の往生ののぞみを遂げることが

用の障りを配慮あつてか？

註 ①、いなかの在家無智の人々のため、とあるのは、都の智者出家を指示されず、編者が自ら愚痴無智の念仏者の自覺に立たれる仏智に充足された謙虚さをうかがうことが出来る。又編者靜遍僧都は、平清盛の甥、池の禪尼の孫、その有縁の田舎に送るものでもある。

一、正しく願ふ念仏

一、あるひとが問うて申しますには、

「このような、①あさましい無智のもの、ただ念仏さえ申せば淨土に生れるとうけたまわつて、それから、ひとすじに、念仏は申して居りますけれども、いかにもその通りである、間違ひなく生れることが出来ると、思い定めることが出来ませんのは、どうしたらよいものでありましようか」

と。それに師がおこたえになつたことは、

「念仏往生の道は、もとより、戒律もたもち得ない、無智のもののためである。若し智慧もひろく、戒律をも完うすることの出来る身であれば、どんな教法であらうとも、それを修行していつて、生死を離れて、無上の菩提をひらくことも出来よう、そうした人々には弥陀の本願は無用である。ところが、煩惱のかたまりとも言ふべき我身には、

破戒と罪根の深きとを簡ばず
但し廻心して多く念仏せしむれば
能く瓦礫をして変じて金と成らしむ。

の七言八句を誦して、淨土宗の肝心、念仏の目足と讃えられました。

僧都は後鳥羽上皇の信頼も篤く、又高野の念仏者、明遍僧都とも信交が深くあられましたが、五十九歳にして、往生の素懷を遂げられました。

出来ようか」

と、このことひとつを、われもくんと、自分の思うままにおたずねして居りました。丁度そうしたよい時に、参りあわせて、さいわいにも、平素の不審に思っていたことどもを、すつかりあきらかにして頂きました。そのおもむきを、早速詳細に書きとめて、②田舎に住む在家の無智なひとびとのために、おとどけしよう、どうかよくくこころをしずめてお読み下さい。

註 ①、隆寛律師のこと。長樂寺は東山のほとりにある。

但し名も所も秘されたのは、念仏法難の時代故に、無

戒律をたもち、心をしずめ、智慧をみがくという聖者の歩まれた道が、とても及びもつかぬことであるからこそ、いまの我等としては念仏して往生をねがうばかりであるぞ」

註 ②、十惡、五逆、破戒、無智の下品の機、極惡最下の人の臨終に、念仏を勧められて、淨土に生れしをきいて念仏申す人である。然し、その浅間しいことが苦になるのは、淨土門に入りながら、まだ聖道門への執心、自力の心根がすたらぬからである。

二、兼ねて廢す聖道

一、またあるひとがおたずね申すには、

「智慧もあり、根機もすぐれた人のためには、万行、諸善の道を説き、根機もつたなく、無智の者のためには、念仏を勧めるのであれば、聖道門のいろくの教は立派で、淨土門の念仏のおしえは劣つているのでありましようか」と。これに師はおこたえになつて、

「たとい、かの聖道の教は深く、この淨土の教は浅く、またかれはすぐれ、これはいやしいとしても、わが身の分際に相応して、おたずねを蒙り、永い流転の苦海からまぬがれて、さとり道の道に退転することのない身にさせて下さるのであれば、教がすぐれていようが、劣つていようが、そうしたことは、今さら問題ではないではないか。深い

浅いのと論じたところが、一体それが何の役に立つのである
ろうか、自他共に害するばかりである。

まして、かのすぐれた人々が、立派な教法をさとつて、
仏になるというのも、このあきれるほどのあさましい身を
もちながら、念仏して浄土に生れて仏になるというの、
仮りに入門に区別はあつても、帰するところはひとつであ
る。善導大師も『仏法に八万四千の門がある。その門はそ
れ／＼に不同であるが、しかし全然別なものではない、別
々の門も入つて見れば、みな同じである』といわれている
こういうわけであるから、聖道門といい、浄土門とい
うのも、みな釈迦一仏の教説であるから、どちらが勝つてお
り、どちらが劣つていゝというべきものではない。それも
知らないで、法華経はあらゆる教にすぐれていると、あや
まつて云う人もある。しかもそのよりどころは、五逆の罪
を造つた①提婆達多も、この教で救われて未来に天王如来
となり、僅かに八歳の竜女も、智慧がすぐれていたの、
この経の力で即身成仏することが出来たというところにあ
る。然しそうした点では、この念仏も同じことである。ど
んな教からもきらわれ、あらゆる仏達からも捨てられた、
罪の深い悪人も、障りの多い女人も、すみやかに浄土に生
れて、まよいをひるがえして、仏のさとりをひろくことが
出来るのであるから、いはば、まことにこの道こそ、諸教

を以てか枉れるを直うせん」とあるのもここを感佩せ
られての仰せである。

註 ①、曇鸞大師は「吾すでに凡夫にして智慧淺短なり。未だ
地位に入らず、念力均しかるべけんや。草を置いて牛
を引き、恒に心を槽檻に繋ぐべきが如し、豈縦放にし
て全く帰する所無きことを得んや」と表白せられてい
る。

註 ②、道綽禪師は『大集經』により「末法時の中の億々の衆
生、行を起し道を修するに、未だ一人として得る者あ
らず。当今は末法にして現に五逆惡世なり。唯浄土の
門のみ有つて通入すべき路なり」と勧め玉う。

註 ③、顯密の教。真言宗の判別で、自宗を密教、他宗を尽く
顯教とす。顯教とは報身化身の仏が衆生の機に應じて
惑を断ち証を得る法門を顯了にとかれたもの。密教と
は法身仏の説かれた唯仏与仏内証の境界で幽妙なもの

註 ④、僧都は小釈迦と呼ばれ、一切経を五回まで読破されし
身も「余が如き頑魯の者、あに敢てせんや」とて「念
仏を先とす」と勧め玉う。又往生要集に「下品の三
生、豈我等が分に非ずや」とあり。

註 ⑤、永観律師は約九百年前の人。京都禪林寺に永観堂あり
密教、三論、華嚴を学び、卅歳頃より浄土を願ひ、晩

にすぐれていると言ふことが出来る。

さて、次のことはまことにいちじるしいことであつて、
深く胸にたたんで、我身をかえりみなければならぬ。

それは、中国の②曇鸞大師や、③道綽禪師すらも、なお
我身はさとき智慧もなく、まことの精進にも堪え得ない身
であると、懺悔されて、④顯密の教をうちすてて、浄土を
願われている。また日本では、⑤源信僧都も、⑥永観律師
も、なお自身は、愚鈍、懈怠の身であると告白せられて、
⑦事理の業因をすてて、弥陀の願力を仰いで念仏せられた
のである。現在でも、これ等の方々にもまさつて、智慧も
深く、どんな戒律や修行でも立派にやつてゆける人は、ま
ことにいずれの法門に入つてなりと、生死海を解脱しなさ
い。すべて何事によらず、縁のあるままに、心もひかれて
行くことであるから、よいのわるいのと、ひとのことをあ
れこれと言ふべきではあるまい。ひとすじに、我身に出来
るかどうかを反省して、ふさわしい道を、見出さねばなら
ぬ」と。

註 ⑧、聖徳太子が最初読まれた法華經に、提婆品が缺けてい
たので、太子は苦心してこれを求められたと伝えられ
る。憲章二条に「人はなほだ惡しきもの鮮し、能く教
うるをもて従いぬ。それ三宝にたよりまつらずば、何

年には念仏六万遍を修す。「病は人の善知識也。吾は
病質にして身体憑むべからざれば勤修息むことを得ざ
る也」と語らる。寿八十没す。

註 ⑨、事理の業因。事とは現象、理とは真如。事觀理觀を淨
土の業因として修すること。

三、願す必具三心

一、また或人が問うて申しますには、
「念仏しても、三心、即ち、至誠心、深心、廻向発願心
を知らないでは、往生することが出来ぬということであり
ますが、このことはどう心得たらよろしいでしょうか」
と。師がそれに答えられるには、

「まことにその通りである。しかしながら、今は亡き法
然上人のお言葉に『三心を知つていても、念仏申さないの
であれば何の所詮もないことである。①たとい三心の文字
さえも知らない身も、自力をすててひとすじに念仏さえ申
せば、自然に三心がのこらず身について、極樂に生れるこ
とができる』と、仰せられたことを、確かに承つたことが
あるのを、その頃はかるくお聞きしていたが、②この頃に
なつて思いあたることばかりで、ほんにその通りであると
大いにうなずかされている。

そこで、今度は、銘々に思うておられる心の底をお打ち

明けなさい。それを聞いてそれ／＼三心に契当^{けいとう}しているか、否かをお答えしよう」と。

註 ①、法然聖人の待者、随蓮房は、念仏は義なきを義とす、様なきを様とす、と一筋に念仏していた。聖人の御滅後に、或時学生達から三心の義を問責せられて大煩悶におちた時、夢に聖人が現われ玉うて池中の蓮華を指さし「念仏往生は、蓮華を蓮華と云うが如し。何人が梅よ枝よというとも動ずべからず」と聞き、爾來念仏三昧にて往生。

註 ②、聖人滅し玉い、同朋また次々に人滅するにつき、学問沙汰におちた人々の臨終は取り乱す者多く、無智にて念仏する者のやすらかな往生を見聞きするにつけて聖人のかねての仰せのいよ／＼間違わぬことが知られ大いに肯^{うな}ずくこと。

四、至誠心

一、或人が申しますには、

「くちには念仏していても、ここに妄念をおこしているようでは、外相^{うわづま}はどうとく見えても、内心が悪いのであるから、これでは虚仮^{こゝろがへ}の念仏となつて、真実の念仏ではない、ということを知りて、まことにその通りであると思ひそれから、しずかなところで念仏しよう、すみきつた心

で念仏申そうといたしますけれども、いつこうにわが心が清らかにとのえられませんが、どうしたらよいでありますか」

と。師は答え給うに

「そのところがとりもなおさず、自力につなぎとめられて、他力を知らぬからであつて、すでに真実の至誠心がかけているのである。

また前述の、口に念仏を称えても、心に妄念がおこつてやまぬから、虚仮の念仏であると云つて、心を清く澄まして念仏すべきであると、勧めている者も、とりもなおさず至誠心のかけた、虚仮の念仏者、いわば定心自力の念仏者であつたよと知らされる。

それというのも、妄念を断ち切つて、口に名号を称えて、内心も外相も相応することを、虚仮を離れたところの、至誠心の念仏であるというだらうけれども、この至誠心を知らぬものの言うことである。

凡夫の心でおこした真実心で念仏を申すのであれば、それは一向に自力の念仏であつて、弥陀の本願に相違するところである。

もはや、①自分でそのところをきよめるといふのであれば、それは②聖道門のところであつて、浄土門のところではない。

難行道のころであつて、易行道のころではない。

自力修行のころであつて、他力念仏のころではない。

さてそれでは、どうしたことが正しいのであるかと申せば、濁世末代に生れた、現在の凡夫としては、自分で煩惱を断ちきることはむづかしいことであるから、妄念妄想もとどめ難いことである。ところが、そういうわれ／＼であることを阿弥陀仏は照見遊ばされて、かねてから、かような衆生^{わがれ}のために、他力の本願をおたて下さつて、名号の不思議なお力で、恰も、無上宝珠を濁水に投ずれば、たちまちに清水に転ずるように、衆生の罪を必ず除かずばおかまいとお誓い下されたのである。そういうわけであるからこそ、他力とも名づけられたのである。

こうしたことが十分に会得されて見れば、自分と自分で、あれこれと苦心して妄念妄想をつゝしめとめようとすることもいらず、またしづめ難い悪い心や、散り乱れる心を、何とかして静めようとなしなむこともいらない。

またむづかしい③観念や観法の道を一心にはげむこともいらない。ただひとえに仏の名号を称えたもてば、その念仏の衆生を撰め取つて捨てたまわぬ本願がゆるぎなく定まつているのであるから、たとえ食欲・瞋恚・愚痴の三毒の煩惱が身にみち／＼いても、間違ひなく浄土に生れることが出来ると信じているからこそ、ここはやすらかであ

る。そうであるからこそ、易行道とも名づけられているのである。

④もしも身は善を行ひ悪をいましめ、心を散らさずして、静かに心を澄ましてのみ念仏せねばならぬのであれば、どうしてか、⑤行住坐臥もいわず、何時、何処でどんなことをしていようと、心配せずに、ただ念仏して弥陀にたすけられよ、と、よき人々がお勧めになろうか。またもし自分で身を整え、心を立派に澄まして、念仏を修することが出来るのであれば、必ずしも仏の御力をたのまないでも、生死を離れることも出来るであらう」と。

註 ①、自分で心を浄める。これ七仏通誡の偈「諸悪は作ること莫^なれ。衆善は奉行せよ。自から其の意を淨くせよ。これ諸仏の教なり」にあたる。

註 ②、聖浄二門は道練禪師、難易両道は竜樹菩薩、自力他力は曇鸞大師、それ／＼に判定せられたところで、遠く浄土の源流を知らされる。

註 ③、観念観法をこらす、とは、観經所説の十三観法。心をこらし静めて行ずる法である。この間は定心念仏にひつか／＼つて気づまじしように願う人である。

註 ④、行住坐臥、時処所縁をえらばず、論ぜず、とは、大悲の至極、他力の妙用である。木橋經に難陀国の玻璃瑠

王使を出して仏に問う。国乱れて手を放すこと能わず如何にして仏道を得んやと。百八の木楼の突で珠教を作り、時と処をとわず、念仏念法念僧せよと、勧められてゐる。

五、深 心 釈

一、また或人が申しますに、

「念仏すれば、一声々に、はかり知れない生死の罪が消えて、弥陀仏のひかりに照らされて、身も心もやわらかになると、経に説かれてゐると聞いて居ります。それなのに、念仏を申し始めてから年久しくなりましたけれども、三毒の煩惱はすこしも消えず、心もますます悪くなるばかりで、善い心が日々にすくむということもありませぬ。

こういう状態でありますので、仏の本願を疑うというのではありませぬが、自分のような、こんな悪い根性では、そなたやすく浄土へ生れさせて頂くなどという一大事がとても遂げられようとは思われませぬ」

と。師の申されますには、

「このことは、誰も／＼がよく歎く性根である。まことに迷うてゐるころである、一体我身の罪の如何によつて、こんなことでは往生はいただけまいと疑うのは、①仏の本願を軽んじてゐるのではないか。これがとりもなおさず信

それも、何時を迷いの始めと知らぬ、遠い／＼昔からの苦海であつて、これからさきも浮ぶ瀬もないと②信知せよ、と勧められて、つぎに、弥陀の誓願の深重不可思議なお力をもつて、このような衆生を導いて浄土に生れさせて下さると信知して、すこしも疑う心をもつなとお勧め下さつてゐる。

このころがよく会得出来れば、わがころの悪いにつけても、弥陀仏の大悲大願のみ誓こそは、③何とも云いあらわし様もなく、すぐれてたのしいことであるよと仰ぐべきである。

④もとより、自分の力にたよつて浄土にまいるのであつてこそ、わが心の悪いにつけても、こんなことではと疑う心を起すのも無理のないことであるが、ひとえに仏の御力によつておすくい下さるのであるから、なんの疑いがあるうかと心得るのを深心というのである、よく／＼これを開きひらきなさい」

註 ①、本願を軽んず、について「千歳の闇室に光到れば即ち明朗なり」とも「四十里四方の伊蘭の惡臭も梅檀の根芽一つで芳香に転ず」とも「百人が百年間薪を集めて千丈の高さに積んであつても豆ばかりの火で半日に焚き尽す」とも「十圓の索は千人がかつても切れないが利剣をふるえば童子も瞬あいだに両断する」等々と高

心がかけてゐる心であつて、言つて見れば、まえの至誠心がまだ徹底していないからである。心をおちつけて、よく／＼ききなさい。

さてこの身のなりで、罪が消えて、心がよくなるであろうなどということは、決して／＼ある筈のないことであるもしそれが出来るのなら、それこそ、即身成仏の道であるそれではどうして、穢土をいとうて浄土に生れようと願う道であろうか。総じて罪が減するというのは、最後の息を終る一念にこそ言えるので、この身をすてて、かの浄土に生れる時のことである。それだからこそ浄土宗という名もついたのである。若しこの身のなりで、罪が一切消滅してええ、さとりがひらけるであろう。さとりがひらけたならば、そのまゝ仏となるのである。仏に成るのであれば、聖道門の真言、仏心（禪）、天台、華嚴宗などの、煩惱の惑いを断ち切つて、真如の理をあかして行く門の意趣である。

善導大師の御解釈によつて、ここをうかがつて見ると、信心についてふた通りの解釈をしていられる。ひとつにはふかく、自身は現に、罪惡に絆され、生死に囚われてゐる凡夫であつて、煩惱という煩惱は残らず身にそなえていて善根といつては薄くすくなく、水に描いた絵と同様ですぐに消えてしまうので、つねに迷いの境界に流れ漂うてゐる。

僧の勸化がある。

註 ①、信知とは、よきひとの仰せを聞信して知ることである

註 ②、親鸞聖人の常の仰せ「さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんと思ひ召し立ちける本願のかたじけなさよ、の味い。

註 ③、三河の了詳師の譬に「足のよしあしは歩いて行く人の話。乗せて渡して下さるにはその要なし」と。

六、廻向発願心釈

一、また或人が申しますには、

「遠い／＼昔から、今日今時にいたるまで、十惡を造り五逆の罪を犯し、或は殺生・偷盜・邪淫・妄語等の四つの重い禁戒を破り、更に仏法を謗るという、いろ／＼の罪業をつくつて来たので、まよいの境界に流転して、いまなお生死の世界にとどまつて、あたかも鳥の巢で卵が何時までも孵化らぬまゝにくちはてるように、幸に人間に生れながら、むなしく生死の世界にとどまらねばならないのであるまこと生死のすもりである。

このような身で、僅かばかり念仏は申しますけれども、愛欲の波浪がたえまなしに起つて、善い心をけがしてしまひ、瞋恚の火焰がしきりに燃えて、功德も焼いてしまひます。こんな工合で、①善い心で申す念仏は、方のうちに一

つぐらいのもので、その余はみな穢れた念仏であります。

こんなことありますから、切に願つてみても、このような念仏で、往生の役に立つとも自分では思えませんし②人々もまた、そうした心をなおさないで、とても往生は出来まいと申しますので、いかにもそうだと思われて、心がまよいますのを、どうしたらよろしいでしょうか」と。

師の申されるには、

「これは、さきに述べた深心がまだ徹底して解つていないからである。こうしたことで、いろ／＼と煩悶して、浄土をねがうところもゆるんで、動揺するというのは、廻向発願心がかけているのである。

善導大師が、念仏の行者を守護するために、三世十方の諸仏に証を請われて、お説き下さった二河白道の譬喩をよく頂いて見るのに、釈迦仏が東岸にあつて『行け』とおしえ給い、弥陀仏の『来れ』との願力をたのむうえは、愛欲・瞋恚の煩惱がどんなにおそろとも、すこしも疑い畏れることはいらぬ、気にかけるなど仰せられている。

まことに、本願真実の白道が、どうして愛欲虚仮の波浪に穢されようか、如何なる悪も本願をさまたげることは出来ないので、返つて本願に打ち負かされてしまふであらう。

また他力廻向の名号の大功德は、自力をもとした虚仮の善根のように、瞋恚の火焰で焼失するというような頼りな

いものであらうはずがない。

そういうことであるから、よしんば業縁に催されて、欲もおこり、腹が立つて、それをしずめることも、堪え忍ぶことも出来ないにつけても、いよ／＼弥陀の願力を仰げば必ず弥陀の大慈悲でおたすけ下さることは、願力が無窮であるから、摂め取つて下さることも決定である。また摂め取つて捨て給ふぬ力強い願であるから、往生も間違ひはないと、おもひ定めて、たとひ如何なる人が来て、云いさまたげようとも、すこしもゆるがず、くじけないところを金剛心といわれている。これと云うのも我執我慢で思ひかためたのではなく、如来の無碍の光明に摂め取られているからである。こうしたところを廻向発願心というのである。このところをよく／＼心得なさい」と。

註 ①、善い心で申す念仏、とは散善の心に迷うているのである。

註 ②、人々もまた、とは「万善諸行をたのむ念仏者」や「念仏を多く称えて、その称える力で浄土を願う人々のこと。」

七 ① 総じて明す 三 心を

一、また或人の申しますには、

八、重て帰す専修に

一、また或人が申しますには、

「①念仏すれば、たとえむつかしい三心のわけがら知らなくても、三心は自然にかけめなく身にそなわるとありますが、それはどういうわけでありましょうか」と。

註 ①、これはこの物語の三問答で、法然聖人が「たとい三心を知らずとも、ただ念仏さえ申せば三心は自然にそなわる」と仰せられたことをひいての問い。一念義の人達は、学問して三心の道理をよくしつて信をもつて往生を治定すると云い立てて、念仏をとりおとして信を多念義の人々は、煩惱をおし伏せて称えねばならぬと主張して、信をとりおとしている。

諸行本願を主張する人達は、三心は一心、その一心は定心観念として弥陀を思いつめて念仏申さねばならぬという。

これ等をさらりと払い給う妙言である。

師の答えられるには、

「雑行をすてて、ただ念仏するのは、脇目をせず、弥陀仏をたのむところが一心一向であるためである。これが至誠心である。①またつねに名号を唱えるのは、往生に疑いが無いからである、これが信心である。また名号をとなえ

「大切なことをかいつまんで、三心の大意をうけたまわりとございます」と。

師の云われるに、

「まことにものつともなことで、これから述べよう。

まず、一心一向に弥陀をたのむのが至誠心の大意であるわが身の分際を知つて、自力を無効とすてて、他力に帰入するところの一心一向であるのを、真実心というのであるそれに反して、他力をたのみず、自力に執心しているのを虚仮の心というのである。

つぎに、浅い自力の心をすてて、深い仏の願力をたのんで、疑いのないのが、深心の大意である。常に聞く通り、弥陀の本願は、一から十まで、本来、罪の深く悪の重い凡夫のために建立下されたのであつて、聖者や、賢人のためでないとして頂いたうえは、わが身が悪いにつけてもすこしも疑い思ひの無く、他力の悲願はかくの如きの我等がためといただくのを信心というのである。

つぎに、もはや本願他力に帰入した身であるから、間違ひなく往生させて頂けることよと思ひ定めて、浄土を願うているところを、廻向発願心というのである」と。

註 ①、三心を別々に説くけれども、実は一体である。丁度児が産れると、頭と胴と脚がそろつてゐる如くである。ただかりに三心を順序を立てて別説したにすぎない。

るのは往生を願うところがおこるからである、これが廻向発願心である。このようなことは、どんな人にも、念仏して浄土に生れようと思うほどの人には、自然に身にそなわることであるから、無智の者も、念仏さえ申せば、②三心はみなかけめなく身にそなわつて、浄土に生れることが出来るのである。

ただつづまるところは、わが身は本来、煩惱ぼんごうという煩惱はことごとく身にそなえた凡夫の身であるから、今更のうちに、わが心のよいのわるいのと、どんなに詮議立てして見ても、血で血を洗うと同様で、解決は得られないのであるから、そのことは打ちすてて、一心一向に弥陀をたのみたてまつて、疑うことなく、往生に間違いないと、決定して念仏申す人は、三心を身にそなえた念仏の行者と申すのである。そこを法然聖人が、たとい三心のいわれを知らなくても、念仏を唱うれば、自然に身にそなわると申されたので、このような道理があるためである」と。

註 ①、蓮如上人の歌に、法を聞く道に心の定まれば南無阿弥陀仏と称えこそすれ、とはこのことである。

註 ②、蓮如上人の聞書に「聖教読みの聖教読まずあり、聖教読まずの聖教読みあり」とも申されるところ。

耳 底 録

——阿闍世王の入信——

柳 瀬 留 治

今年も常観先生の忌日を過ぎて年を迎えることであります。先生はいつのお話でも、信を傾け熱の籠つたお話をされるのですが、思い出すことは、求道会館の夏期求道会に教行信証の信の巻の逆悪阿闍世王が、悔熱苦悶の果、猊尊の矜哀によつて入信した条を講じられた時の言々句々がまさ／＼浮んで来るのです。

それは今の求道会館が出来た翌年か、翌々年、大正五六年の真夏でした。私は廿四五でしょう。どうにも信仰が判らず、汗を拭き／＼聴いていたことです。最も感動したのは「為阿闍世王入信」のお言葉です。

多分其後『求道』にも載せられたことであろうが、それは灰滅して今は見る由ありません、信の巻をひもときながら。故先生の力を極めて説かれた所、私の有難く思う所を書くの外はありません。

当時はお慈悲が判らず、ただ夢中に聞いていたのですが、今は一つも無駄なく、凡てが有難いことに思われます。

私はまだ若い頃、仏のお慈悲が判らず、『起信論』を読んだり哲学書を読んだりして、仏の本体が真如で、不生不滅なんだ、などと思つていましたが、そんな道理や理屈でなく、仏の慈悲から進り出たお言葉として限りなく有難いのです。信の巻の後の方に

九、無義むぎきを 為義ゐぎと

一、また或人の申しますに、「名号を唱えるときに、そのたびごとに、三心のわけがらを常に心にたもつて、即ち心をまことにし、疑いなく信じて、浄土を願うて念仏を申さねばなりませんか」と。

師のおこたえは、

「そういうことは、全然するに及ばぬことである。ひとたび決定してからうえは、たゞ南無阿弥陀仏と称えるばかりである。三心がそのまゝ、称名の声にあらわれてのちに、三心のことがらをあれこれと心の底で詮索せんさくすべきことではない」と。

南無阿弥陀仏 愚禿 親鸞写之。

建長六歳、甲寅九月十六日、之を書写す。

引かれた。

「如来は常住にして交易あることなし」のお言葉も、畢竟「われ阿闍世王のために、無量億劫に涅槃に入らず」と仰せられた様に罪業に悩む我々のために死ぬに死に切れない、とのみ心、その常住、それが有難いのです。

私が気付かせて頂いて後、余りにも有難いので、常観先生に、遍額に書いて頂いたのは「独清閑」のお言葉でした。信の巻のお話で先生の心をこめて説かれた善導大師の「九十五種みな世をけがす、唯仏の一道のみ独り清閑なり」の語の一句なのです。今は戦災で焼けましたが、その筆蹟を故牧野治兵衛の彫つた遍額が、一信友の家に掛けてあるので、毎年暮れに訪ね、その額を読み返して喜ばせて頂くのです。

私の様に長年間、仏の一道が判らず、九十五種とも云われる雑多な説に耳を傾けた為、又してもそうした迷いが心に浮んで来て、惑わそうとするのです。其の都度「唯仏一道独清閑」のお言葉に思い至つては、ただ念仏する次第です。

阿闍世王が、母の韋提希を刺そうとし、父大王を殺害した王舎城の悲劇は、観經のお話でお聞きのことでしょうが、阿じや世の欲

念、それに、当時の六十二見、九十五種といった邪道が油を注いだものでしょう。

さて父大王を殺した阿じや世は心に悔熱を生じ、全身に瘡を発し臭くて近けない有様となり、五体芭蕉の葉の如く慄うて悶絶している。母の草提希は種々薬を塗るけれども、瘡の毒熱が烈しくなるのみです。大臣達が種々に説くが何の慰めにもならぬ。信仰の深い侍医の耆婆が来て仏の慈悲を説き、共に釈尊の下へ行つて救いを得ましようと言います。

その時、恰も空中から「早く耆婆の言に従つて釈尊の許に行け他の邪説に迷わされるな」と、殺した父大王の声です。

常観先生はこのくだりに至り

「かように、刃を向けて殺そうとした母が、子の悔熱狂乱するを見、自らも狂乱せんばかりの思いを以て看病し、又殺した父大王の、かく慈みの声、誠に仏の真心そのものである。私はかつて信仰に苦悶し、然も筋炎を起こした時、私の親は全くそうであつた」と、力を籠めて説かれるのでした。そして先生は

如来は一切の爲に常に慈父母と作り玉えり

当に知るべし諸の衆生は、皆是れ如来の子なり

世尊の大慈悲は、衆の爲に苦行を修し玉うは

人の鬼魅に著れて、狂乱して所爲多きが如し

の偈文に感泣されるのでした。先生はこの偈文の有難さを、御著の『懺悔録』だつたか『信仰余瀝』かにも引いていられる。又この偈文を、御法主に書いて戴かれたものを仏間に掛け、人毎に

仏の親心はかくの如しだと説かれるのでした。

さて一方釈尊は涅槃に入られる死期の近づいていられるのに、「阿じや世王のために涅槃に入らず」とやがて耆婆に伴われて来るであろう阿じや世を待ちに待つていられる。

この「為阿じや世王不入涅槃」の「為」について、釈尊の慈悲のこもつた仰せに對し、先生はいたく感激され、熱をこめて説かれるのです。それは信の巻を講じられた時だけでなく、しばらく先生の説かれる所でした。即ち御文の

「わが爲というは、一切凡夫、阿じや世は、普く一切五逆を造る者なり。また爲は、即ちこれ一切有爲の衆生なり。われ經に無爲の衆生のために世に住せず。何を以ての故に、それ無爲は衆生に非ざるなり。阿じや世は即ち是れ煩惱等を具足せる者なり。また爲は即ち是れ仏性を見ざる衆生なり。若し仏性を見むものには、我終に久しく世に住せず」と、熱をこめて大衆のために説かれるお心の感激です。

以上は「為」を有爲の義としてのお心ですが、以下では反対に「為」を無爲の義のあることを説き、阿じやを不生の義のあることを説いて、深い仏の真心が示された。

即ち「また爲は名けて仏性となす。阿じやは名けて不生とす。世は怨に名く。仏性を生ぜざるを以ての故に、即ち煩惱のあだを生ず。煩惱のあだを生ずるが故に、仏性を見ざるなり」と先ずお説きになり、更に進めて、「煩惱を生ぜざるを以ての故に、即ち仏

性を見る。仏性を見るを以ての故に、即ち大般涅槃に安住することを得、これを不生となづく。この故に名けて、阿じや世とす」と逆惡の阿じや世の仏に救われる種子あるを説き、「この故にわれ阿じや世王のために、無量億劫に涅槃に入らず」と仰せられる。そこが先生の感泣される所なのでした。

その次も有難く、先生の満面の喜びを以て仰せられる所でした「その時世尊、大悲導師、阿じや世王のために月愛三昧に入れり三昧に入りおわりて、大光明を放つ、そのひかり清涼にして、ゆきて王の身を照し給うに、身の瘡すなわち癒ゆ。王の曰く。耆婆……何の因縁をもつてこの光明を放ち給うぞや。耆婆答えて曰く大王、いまこの瑞相は王のために及ぼすに相似たり。王さきに世に良医の身を療治するものなしと言うが故に、この光を放ちて先ず王の身を治す。然して後に心に及ぶ」

と、この御慈みによつて放たれた月愛三昧の清涼な光が「先ず王身を治し、然して後心に及ぶ」が、先生のお喜びになつた所でした。そしてそれは、又先生御自身が、日常私どもに對して向けて下されたお心でした。よく出獄してから困り、金を戴きに來た者に施され、信仰に苦しんでいる者の境遇をも救つておやりになつたことは、一再ではなかつた。又信仰をお聞きしに來、時を過し、幾十回も食事を恵まれた者の数を知らない。私など震災で病氣した時、他から過分に戴いたお金です、分けて遣いましよとて、大奥様から大金を頂き感泣したことでした。これ誠に「身を治し、のちに及ぶ」のみに他ならず、今も涙の込みあげて來

ることです。それがまた常音先生には常であつた。今日、体の健やかにあることは全く両先生の賜物で、かくして信を培つて下され、今日ある次第、私には、仏というのは両先生を通じて知り得た仏なのでした。

池山先生が「……皆既蝕、若しくは金環色の光景……太陽光線の……銀霧、紅炎」それが親鸞聖人の、源空上人を通しての「ただ念仏」とされているのと同様です。

猶、池山先生が、聖人のすがすがしい姿を「阿弥陀湯」「阿じや世の月愛三昧浴」の浴後の清しい風情と見立てていられるのも嬉しいことです。

さて阿世王は、耆婆よ、世尊は、こんな私に遇つて下されるだろうかと聞く。耆婆は答えて「たとえ、一人にしかも七人の子あらん、父母の心平等ならざるに非ざれども、しかも病子に於いて心すなわち偏に重きが如し。大王、如来もまた然なり。もろくの衆生におきて平等ならざるに非ざれども、しかも罪者において心すなわちひとえに重し」と。

これまた常観先生が、病子、片輪な子、出来の悪い子、刑余の子に對する親の心がひたむきである。殊に仏の慈悲は、その憐れな者のため狂乱の有様だと仰言るのでした。

更に有難い所は、阿じや世王が耆婆に伴われて釈尊にお会いしのお言葉です。

「王として罪を得ば、諸仏世尊もまた罪を得給うべし。何を以ての故に、汝が父先王が、常に諸仏にもろくの善根を植えたり

き。その故に今日王位にあることを得たり。諸仏もしその供養を受けざらましかば、即ち王たらざるまし。もし王たらざるましかば、汝即ち害を生ずることを得ざらまし。もし汝、父を殺してまさに罪あるべくは、我等諸仏また罪あるべし。もし諸仏世尊つみを得給うことなくば、汝独りいかにして罪を得んや……」

の「諸仏まさに罪あるべし」と、仏が阿じや世と罪を共にして下される。そこを先生が繰返し、共に墮ちてやろうとの仏の大慈悲を説かれるのでした。

かく釈尊が、諄々と説かれ、汝は狂つてしたことだ、酔つてしたことだ、惑うてしたことだ、との同情の大慈悲にふれて、阿じや世王も、初めて仏の慈悲に救いあげられ、

「世尊、われ世間を見るに伊蘭子より伊蘭樹を生ず。伊蘭子より栴檀樹の生ずるを見ず。われ今初めて伊蘭子より栴檀樹を生ずるを見る。……これわが無根の信なり」といつて喜ぶに至つたのである。伊蘭というのは印度で伝説に残っている喬木で、悪臭を發し

その赤い花を食うと発狂するとされている由です。

更に阿じや世王は、

「われもし如来世尊にあわずば、まさに無量阿僧祇劫に於いて大地獄にありて無量の苦を受くべし。われ今仏を見たてまつる。この仏を見たてまつりて、得る所の功德を以て衆生の煩惱惡心を破壊せしむ」

と申上げ、更に王は

「世尊もし、われよく衆生の諸々の惡心を破壊せば、われ常に阿鼻地獄に在りて、無量劫のうちに諸々の衆生のために苦惱を受けしむとも以て苦とせず」

と実に著しい入信の喜びです。地獄に墮ちて苦を受けても苦としないと、決定です。近角先生はこの阿じや世の入信によつての大転廻の違大さに感泣され、我々に熱をこめて説いて下された。その面影が今もまぎ／＼と浮び、感慨に咽び乍ら耳に留まる所を誌した次第です。

一道会 の

記

柿原徳草

十月三十日、先師池山榮吉先生の二十三回忌が当山淨住寺で営まれた、例年の池山忌と違つて二十三回忌であるから感慨もひとしお深いものがあつた。次ぎの大きなお年忌といえは三十三回忌

。特に私など年長者の部類にはいつてゐることであり、この世における最後のお年忌のような気がして感慨はまことに切実なものがあつた。

この日は生憎、小雨が降り、それが止まれば曇り空が秋空一杯を覆うといった晩秋の気にも似たお天気模様であつた、前の日も後の日も共に秋空高く晴れ渡つて、この日だけがしみ／＼とした小雨曇天の暗い一日であつた。しかし秋の雨は誰にも物を思わすものである、先生の好きだつた「城ヶ島の雨」の歌「雨は降るふる城ヶ島の磯に、利休ねずみの雨がふる」の雨もしのばれて、好天気であるべきこの一日を、特に雨の一日に迎えたことは、先師を憶念し自己を顧みるのに恰好の、まことによき一道会であり、二十三回忌であつた。

午前から松本解雄兄が来る、今年は思いもかけなかつた渡辺種彦兄が友人一名と共に突然やつてくる、十五年程会はないといつていたが、恐らく私とは日支事変に出征の時以来のように思える、まして一道会の席で会うのはこれが初めてではなかつたかと思ふ、思ひもよらぬ遠来の珍客であつた。これらの人々をきつかけに、花田兄夫妻、白井先生、池山敏郎夫妻一家五人、聖鸞宗時代の大淵三雄兄は浜松から、加多岡兄、幸寺兄、宮地兄、佐々木兄、中井兄、奈良女高師時代の無憂華会の福本慶子姉は今年に御母堂と共にこられた、芦屋の渡辺範介氏、梶井孝一郎氏一家、京都同信会の人々、それに今年は近角常観師の法流の方々が、毎年來られる大字氏兄弟や加藤氏の外に、名古屋から江洲から大勢参集され

で、近角先生と池山先生との深い／＼因縁が期せずして一堂に会

してお念仏一つに解け合つたのであつた。会する者約四十人、今日は雨だから少いかなと思つた私の心配を吹き飛ばせて、盛大な二十三回忌の「御催し」にあずかつたのであつた。主義や理想や主張を／＼／＼、吾我对立抗争に寧日なき現在の地球上、特に身近い日本の現状の中に、高原の陸地には咲かない蓮花が卑湿淤泥の池の中にかくも麗しく一堂に会したことは譬えようもない深い／＼感慨であつた。

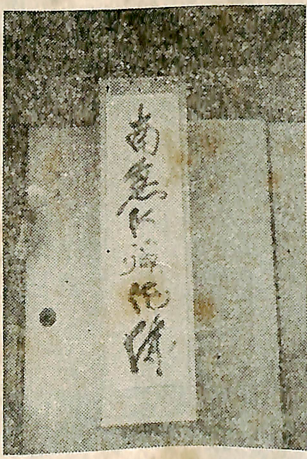
白井先生は風邪の気味で違和の御身体を、押して御出席下され業についての比喩の法味をお話し下さつた。現在の左右相剋の世相、浅沼社会委員長の刺殺事件や、全学連の極左的行動による日本全体の混乱も、それらは皆吾々の受くべき業報であつて、無明の闇の姿に外ならない、一人々々のこの業報も仏の智と仏の慈悲によつてのみ転ぜられ浄められるというお話であつた。

花田兄は大経の中に仏の説きおかれた「滅度を示現して極済すること極り無し」の仏語を比喩しきりに思い浮べておられる旨を詳細にお話し下さつた。三千年の遙かな過去の世に釈迦牟尼仏が滅度を示現され、引いてはもろ／＼の祖師方、近くは近角池山両師の滅度を示現されてからの極済極りない事実を深い信憑のまゝにその場に吐露して下さつた。

松本兄のお話は私が風邪氣であつたのと、それにあれこれと氣を使つて居たりして、まことに申訳ないことだがお話の条が思い出せない、相済まないこととお詫び致します。宮地兄は御多忙中

特に会の時間だけ御参会下さつて、近ごろの信味について、特に歎異抄十三章の業の条り、本願ほりと、願にほこらるゝにあらずや、の微妙なお味について細々と吐露されるところがあつた、私は拜聴しつゝ、お念仏にひとたびこの世で会わせて頂くと、それが吾我を傍らに居去らせて、生涯、私という一人のいきものを照し出し問題を与え解きほぐし無量の法門を無尽の煩惱海に絶え間なく明らかにさせ、生き甲斐を起こさせ、もつと学ぼう、もつと聞こう、という風に、引き廻し、お相手下され、途方もない大きなものに乗り込ませてしまふ、何という不思議なことだ、有難いことだと讃歎の念が息まないことであつた。今日二十三回忌の御縁には白井先生の業のお話に宮地兄の業のお味ひ、それに花田兄の滅度を示現して、(速到三無量光明度)、極済極りなし(遵三普現之徳一也)、業の車がくる／＼廻つて大雨を降らせ、虎はうそぶき、竜は雲をよぶ大縁起の長い流れの中に、それに即して一つになつて一如法界から真身を顕わされて阿弥陀仏となり池山先生となりして救うて落うて息まない大悲の親様がいらつしやる。それが一道会の今日の会坐を設けさせて下さつて、遠く十方につながる、時間的には過去迦葉仏の昔から未來は弥勒仏の世まで一人の有情の迷いを尽すまで終らないという、その仏と仏にもこの会坐は通ひ合っているのではないか。業と救いの無尽。吾我相剋の修羅場と阿弥陀仏の大悲応同無碍の化益と。「雪深々たる所愁猿去る」とか、一道会は正に大地六種に震動するが如き、まことに無動の動の会坐であり、仏の一音声大千を覆うて只南

はじめられると「無阿弥」まで一度も筆をしめされない、見ている私まで、筆が少しかすれ出すがな、と氣がせいしてしかたがない「弥」の「××」「××」の所など筆を横にされたり廻らせたり、ハラ／＼していると、サツと海に筆を一下して、突差に「陀」の字に筆を打ちつけるように思い切つてウンと力をおこめて書き初められ「仏」の所に至つて氣をぬき休そのものをもたせた勢いで最後の堅の一条を悠つくりと引き終られた、固りにいる吾等二、三



人が思わず緊張感から解き放たれて思わず感嘆と軽い嘆声と共にお念仏した、その書かれた時間は、こうして書くときと長いのだが、実は、これが息づまる緊張のしかも一瞬の早さであり、もう書かれてしまつた、という瞬時の緊張と解放であつた。皆が瞬時にいろいろの感をこめて茫然としていたときに、筆をおかれた先師は「これでも、計らいつめてして、ね」と、お念仏されたのであつた。吾等は、再び、深い渾暗の底から

無阿弥陀仏一つに包まれた感懐であつた。私は感興に乗つて筆を走らせすぎたかとも思う、一道会の記でなくなりそうである、だが感興はつきないのです。つきない思い出を再び会の記録にかえて申すと、以上の皆様の他に、大淵兄、加多岡兄、それに渡辺種彦兄が述懐をそれ／＼のべて下さつたが、特に渡辺兄は、昔の聖鸞寮に帰つてきたような、或は蓮華谷の池山先師のお宅に行つた集りのように、何かお念仏に憑かれてウロ／＼して少しも落付かない姿、嬉しくてたまらない言動、「念仏は若い時に聴かなくちあ……」と、今にも坐談を始めはしないかといった姿に、私は嬉しい感懐がこみあげてきたのであつた。時を超えてしまつて、今も三十年前も区別がなくなつてただ「一つの会」がそれらを通貫してそこにあるだけの感が深かつた。先師の遺影を前にして、先師と近角師の染筆が懸け並ぶ四隣を仰ぎつゝ、青黄赤白色とり／＼の述懐、述懐は続いたのであつた。

なお今年は、先師御染筆の、恐らく現在一つしか残つて居らない御名号の複写刷りを、参会諸兄姉にお頒ちすることができて、まことに有難く欣しいことであつた。これは曾て先師御在世のみぎり、岡崎親鸞会に御招聘の折、宿舎杉浦家の奥座敷で二三の同信の友の前で、先師が御揮毫下さつたものの写しで、現にその御軸をこの会に先師遺影の背ろにお懸けして二十三回忌を催おしたのである。それについて思ひ出すことは、——その御揮毫の座には私も侍したので、現々とその時の光景が目前に浮かぶのだが、先師がやおら筆を硯海に一染して、紙面に御名号の「南」を書き

湧きいずるお念仏の光に唱和したのであつた。今度の廿三回忌には、同信の因縁深い、御染筆の座に侍された一人その他因縁深い人々の御冥加によつて、この版が出来上つたのであり、まことに先師の威神力がこの印版を施行されたこととなるのであり、有難いことであつた。

先師の人格を、しかもその晩年の御人格をまぎ／＼と示現し、しかもその筆跡の内には、聖人を異身同体、一紙の表裏の如くに、常に仰がれた聖人の筆跡が、先師のものとなつて非有非無ともいふような先師の莊嚴名号のいのちとして顯われていることが私には殊更に有難いのである。この御名号が十方に響き渡る大地を打つよりも確実真実である。阿修羅の鼓は打たざるに鳴るという、そのようにこの南無阿弥陀仏のお名号は凡十方に無碍に四維上下に無量にひびきに響くこと間違いない。そう思つてこのお年忌の御縁を尊く頂いたことであります。

菊供へ歎異抄読む、嗚咽かな
秋灯下、師恩仏恩沁む身かな
菊の香の堂と先師を遙かより

編集後記

謹んで称名裡に新春を賀し奉ります。ことに本年は聖人の七百回忌をお迎え申しました、まことにまたとない難い年でありました。

一人居てよるこばば二人と思うべし
二人居てよるこばば三人と思うべし

その一人は親鸞なり

韻々として、時を超え、処を超えて、慈訓は心底をうつて参ります。御仏前、祖師前に座して、遠く深い御縁を謝し奉るばかりであります。

嗚呼、祖師聖人いままさずば、三界に家なき身をもちながら、はてしなく生死の大海に流浪して、他をののしり、怒り、自を歎き、苦しめて、自暴自棄の破滅の淵に沈むことは必定であります。

聖人は、このたすかるべからざる身を、御身にかけてお知らせ下さつて、救いなき身の救いを、弥陀の本願にありと信証して下さつたのであります。

念仏成仏の十道ここにひらけ、凡夫直入の白道ここにひらけたのであります。生のよつて立つところ、死のやがて帰すべきと

ころを、我等の身に頂けたのであります。大恩、謝しつくせないことであります。

○

意識後世物語は、七百回忌の私自身の記念として誌しました。祖師の御勧め下さる御心の一端を味わせて頂きましよう。著者の御名が誌されてありませぬことは、一つには歎異鈔も同様でありますし、仏典の大切なものに筆者の名が無いところから、無我な御心の現れであります。二つには、律師が流罪された方で、反対者の多い中で、名を隠されて無用の抵抗や障害をさけられたのであろうかとも想像されます。これにくらべて、この物語の類似の書の、閑亭後世物語や、捨子問答に、律師の名が記してありますことは、夫等が律師の作でないことを証明していると思われれます。識者の御高見をうかがいたい次第であります。

△耳底録、の柳瀬先生原稿は、常観先生の忌月に頂く予定でしたが、正月号になりました。御蔭で常観先生の信の徳光に触れさせて頂きました。

常音先生の歌を思い浮べます。

この心これを阿闍世とのたまいて
見捨てじという御慈悲なりしか

善し悪しは人にはあらん大恩の

阿闍世われにはよしあしはなし

△一道忌の模様を榊原師が書いて下さいました。なお池山先生の、半切ものオフセット刷の名号は、御申込みが段々ありまして品切れになりましたが、再版を榊原師にお願ひ申したいと存じます。

一枚百円、送料共、であります、この際御希望の方は慈光社へ御申出下さい。出来次第お送り申します。

御案内

一月は第二、三、四の日曜に例会を致します。二月からは例月通りであります。

定価 一部 三十円（送共）

半年 百三十円（送共）

一年 二百四十円（送共）

名古屋市南区新上町二ノ八八

編集・発行人 花田 正夫

名古屋市中区千種町馬走二八

印刷人 本田 政雄

名古屋市南区新上町二ノ八八

發行所 慈光社

振替口座名古屋一〇四七〇番